

園芸

原木きのこの作り方

冬の間は農閑期に当たり、田、畑の作業は非常に少なくなります。この期間を活用して、栄養満点のシイタケなどの原木きのこのづくりに挑戦してみたいかがでしょうか。

1. 原木伐採・調整

きのこの作りの出発は原木作りです。きのこの発生に最も適した樹種は表1のとおりです。伐採時期は樹液の流動が停止した12月～2月が適期です。伐採後は葉がついた状態で1ヶ月ほど乾燥（葉枯らし）させ、1mぐらいの長さに切ります。

2. 植菌

原木が出来たら菌を植えこみます。きのこの中でもシイタケには多くの品種があります。代表的な品種は表2のとおりです。一般的に使用されている菌は種駒、オガ菌に加工されています。植菌の時期は梅の花が咲く頃から桜の咲く2月から4月です。植菌の仕方は図のとおりです。

表1 原木の樹種

シイタケ	ヒラタケ	ナメコ
クヌギ	エノキ	カエデ
コナラ	ヤナギ	コナラ
シイ等	クワ等	カシ等

表2 シイタケ菌の品種(農協種菌)

品 種 (成長適温)	発生時期 (発生温度)	特 徴
115号 (16℃～8℃)	晩秋～春 (8℃以下)	肉厚のジャンボ品種
324号 (20℃～8℃)	秋・春 (14℃以下)	肉質が硬く、美味しい 1年目から走り子が多い

※本来の発生時期より、少し早くきのこが出る

水稲

平成29年産水稲の作柄と

次年度の対策

1. 気象の特徴

- 平成29年の稲作期間の気象は次のような特徴がありました。
- ①5月は高気圧の影響で晴れる日が多く、気温は平年と比べ高く推移しました。
 - ②6月の気温は寒気の影響で平年より低く推移しました。上旬は高気圧に覆われ晴れる日が多く、下旬は梅雨前線の影響で曇りや雨の日が多くなりました。
 - ③梅雨期間は6月20日(平年より13日遅い)～7月13日(平年より8日早い)で平年より非常に短くなりました。
 - ④7・8月の気温は平年よりも高く、梅雨と台風の影響で集中的に雨が降る日がありました。日照時間は平年並みより多く推移しました。
 - ⑤9・10月は雨の日が多く、寒気の影響で気温は平年並みよりやや低く推移しました。日照時間は平年並みより少なくなっています。
- 気象については図を参考にしてください。

2. 水稲の生育概況

- ①育苗期間中の5月は日中の気温が高かったため、一部で苗ヤケが見られました。
- ②6月上中旬の気温はやや低かったものの、6月下旬以降の気温は高めで、生育は概ね順調に推移し、茎数は平年並みよりやや多くなりました。
- ③病害虫については、ジャンボタニシ(スクミリンゴガイ)は6月上中旬の移植期間がやや低温で推移したため、活動が停滞気味であったこと、また降水量が少なく田面の水位をコントロール(浅水管理)しやすかったことで移植苗の食害

3. 仮伏せ

植菌したら2～3ヶ月間、ほだ木(原木に植菌したもの)を横積み等をし、菌糸の活着を図ります。場所は日当たりの良い林の中が適しますが、裸地や庭先など乾燥しやすい場所ではコモ、ムシロ、枝葉などをかけて保湿します。なお、雨が少なく、ほだ木の下面に湿り気がなければ、1週間に2回程度散水します。

4. 伏せ込み(本伏せ)

きのこは高温と乾燥が大敵です。そこで仮伏せ2～3ヶ月後、白い菌糸が見え始めた頃に、直射日光が当たらず、十分に雨が当たり、かつ通風、排水の良い涼しい場所に伏せ込みをします。庭の木陰なども利用できますが、直射日光が当たらないように遮光ネットやヨシズをほだ木の上に張ります。また、9月頃に菌糸を均一に成長させるため、ほだ木の天地返しや積み替えを行います。

● 駒菌栽培

駒菌の場合
(シイタケ・ナメコ・ヒラタケ)

● 穴の配列

● 直径10cmの原木なら30本程度植付出来ます。(1,000駒)

● サンドイッチ栽培

オガクズ菌の場合
(ナメコ・ヒラタケ)

● 直径20cmの面なら20面植付出来ます。(オガ1本)

伏せ込み(本伏せ)

日陰で・風通しが良く・雨の当たる樹木の下などに置きます。きのこの種類によって場所やほだ木の組み方を変える



駒菌栽培は2年目の晩秋から、サンドイッチ栽培は植えた年の秋から収穫できます。

※図は財団法人日本きのこセンターの資料を引用

5. きのこの発生

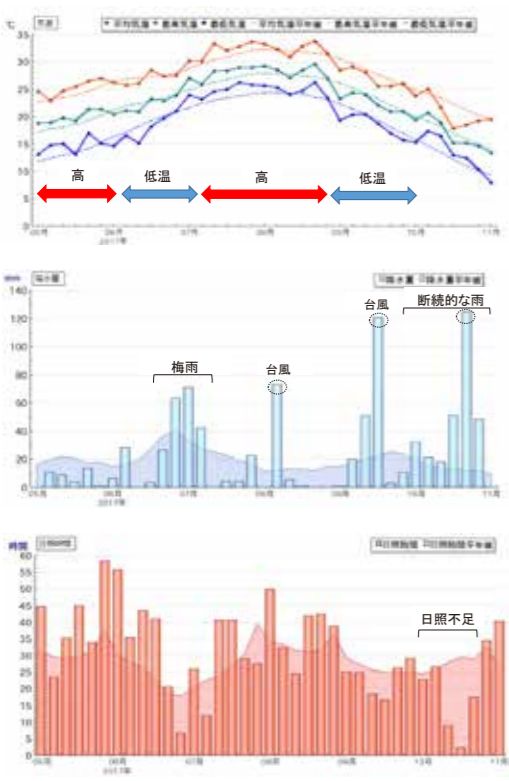
夏が過ぎ気温が下がりはじめると、きのこの原基が出来はじめます。この頃は、水分が必要なので積極的に散水します。気温が15℃前後になると、きのこが発生し始めます。その後、冬になると低温、乾燥で、きのこの発生が止まりますが、春になり気温が上がり始めると再びきのこが発生します。春は成長が早いので採り遅れないように注意して下さい。

(営農部 橋本 忠幸)

3. 次年度に向けて

- ①土作り
稲わらは焼却せずに、土作り資材とともに早めにすき込んでください。次年度の浮きワラ等の防止になります。
- ②病害虫防除
ジャンボタニシ対策として、次年度の発生量を減らすために、冬期(12～2月)に2回程度圃場を耕耘し、土中で越冬

平成29年度稲作期間中の気象(アメダス地点:倉敷)



③ 水管理の徹底

分けつ期～幼穂形成期の期間は常時灌水をせず、間断灌水を行い根の活力維持に努めましょう。また、高温時は掛け流し灌水が望ましいです。(備南広域農業普及指導センター 安藤 裕二)